

# カール・クラウスと第一次バルカン戦争

— 『ファッケル』におけるオスマン帝国の衰微—

藪 前 由 紀

今世紀初頭、ヨーロッパ大陸とアジア大陸の接合点であるバルカン半島で激しい戦闘が繰り広げられた。バルカン戦争である。いかなる戦争であったか。

13世紀来この両大陸に跨って勢力を揮っていたのはトルコであった。14世にはオスマン帝国がバルカンの諸民族を抗争の末相次いで破り、帝国の支配下に治めた。しかしその後オスマン帝国は衰微し始める。19世紀にはバルカンのキリスト教諸民族、即ちブルガリア、セルビア、モンテネグロ、ギリシアは、オスマン帝国から政治的独立を達成し、今世紀初頭には軍事化傾向を強めていた。トルコがイタリアとの戦争に敗れて窮状に陥ったのに対し、1912年10月ブルガリア、セルビア、モンテネグロ、ギリシアはバルカン同盟を結束しオスマン帝国に宣戦布告した。同盟軍は各戦線で勝利を収め、数週間の内にバルカンにおけるオスマン帝国の領土の大部分を解放した。ところがバルカンへの発言権を保持しようとするヨーロッパ列強の介入により、同年12月一旦はロンドンで休戦協定が成立し講和交渉が始まったが、オスマン側の抵抗運動によってそれも中断され戦闘が再開された。バルカン軍はそれでも次々とオスマン軍の要塞を陥落し、1913年4月オスマン帝国はついに同盟軍の前に屈した。

この戦争によりバルカンのキリスト教諸国はヨーロッパに存在したオスマン帝国領を解放したが、同時に今度はバルカン諸国間の領土問題や民族主義的対立を生み出す結果になり、それは第二次バルカン戦争(1913年6月から8月)へと発展し第一次世界大戦への「序曲」となった。以来戦火の絶えないバルカンは「ヨーロッパの火薬庫」と呼ばれる紛争地となったことは今や周知の事実である。

1912年11月から12月にかけてカール・クラウス (Karl Kraus 1874-1936) は彼が手ずから編集した雑誌『ファッケル』 (*Fackel*)<sup>1</sup>にこのバルカン戦争 (第一次) に関する一連の新聞報道記事を引用した。それらは『これが戦争だ、戦争だ、悪魔だ』 (*Das ist der Krieg-c'est la guerre-das ist der Moloch!*) (F, 360-362, 1912, S. 39ff.) という著作及び『戦争だーブルガリアの成功の秘訣ーバルカン戦争への後記』 (*C'est la guerre. Das Geheimnis des bulgarischen Erfolges. Nachträgliche Anmerkungen zum Balkankriege.*) (F, 363-365, 1912, S. 33ff.)<sup>2</sup>というグロッセの中に引用されている。(以下双方併せて『戦争だ』と記す。必要に応じて『前半』『後半』と区別する。) しかしながら、筆者クラウスがそれらの引用文に何らかの分析・コメントを施すことは殆どなく、新聞記事からの引用を次々と羅列しただけの構成である。つまりクラウス独自の「引用自身に語らしめる」手法が、ここで既に生彩を放っているわけである。

これら新聞記事の引用は第一次世界大戦後になって、クラウスのエッセイやグロッセを集めた著作『黒魔術による世界の没落』 (*Untergang der Welt durch schwarze Magie* 1922)<sup>3</sup>に収録、上梓されることになる。その著作の中でクラウスは『戦争だ』を掲載した当時の時代状況を回顧しながら、その「引用自身に語らしめる」手法を使用するに至った事情を苦渋混じりに次のように告白している。「あの頃から勃発的出来事が新聞の引用や現実歪曲によって百万倍にも誇張されたゆえ、私は……あの極悪非道な新聞の声を取り上げ、今や……世界が無秩序と戦火の中にあるなか、恐怖のモノローグを叫ぶまでに至った、そのモノローグの調子を付加したいという誘惑から逃れられなかった。……」 (1915年記) (Ibid., S. 416.) この告白からは、「真実」が新聞という「魔物」によって「虚構」に変えられていった事実・時代を、クラウスは決して看過しなかったことが窺える。

しかしここで若干時代背景を補足する必要があるだろう。ちょうど世紀転換期から今世紀始めにかけ、オーストリアのウィーンではクラウスの天敵であった新聞業界の首領『ノイエ・フライエ・プレッセ』紙 (Neue Freie Presse) を筆頭に、各種の新聞が着々と売上部数を伸ばしていった。各新聞はまたウィーン社会で俗受けするような内容の記事や風聞を盛り込

んでは、「予約購読者」を取り込んでいった<sup>4</sup>。クラウスはこれらの新聞記事の引用を主体に「引用自身を語らしめる」手法を駆使し、彼の時代を現実とは異なった相貌に描出しようとする現象、虚飾や現実隠蔽に対して容赦なく戦った。それは一世を風靡したオーストリア印象主義の唯美的態度に端を発し、延いては19世紀のヨーロッパ文化総体までも広く対象とした。

『戦争だ』に立ち戻ろう。クラウスの引用記事について、イェンス・マルテ・フィッシャー（Jens Malte Fischer）は、「[第一次大]戦時中の『ファッケル』は出来事を逐次的に記した年代記からは程遠い。戦局に関する絶えざるコメントを期待する者は、『ファッケル』を読んで失望するであろう。詳細な戦争経過報告、外交文書、軍事的戦略とはといえば、せいぜいそれらが新聞報道を通じて情報処理された上でクラウスの関心を引くに過ぎない」<sup>5</sup>と説明する。我々がクラウスの『戦争だ』を読む際にも、小論冒頭に掲げたようなバルカン戦争の経過に関する一般的記述や、政治的・軍事的レベルの報告や公文書を期待することは出来ない。

『戦争だ』の引用記事も、戦地に派遣された軍事通信員達の個人的な報告記事を出所とするからである。これには留意したい。またクラウスに従うと、当時は新聞報道によって事件が「百万倍にも誇張された」というが、ならばそこには新聞報道により媒介された一種の潜在的イデオロギーが存在しよう。

そして追記しておくならば、『戦争だ』の購読は必ずしも単なる新聞記事の購読とも等価ではない。新聞報道記事の引用の取捨選択、強調や省略はクラウス自身の手作業に拠るものだからである。この技法が「魔物」に対する人道主義者クラウス、清廉潔白者クラウスの辛辣な風刺である。

さて更にこの第一次バルカン戦争が勃発した時代に固執するならば、この時期、とりわけ第一次世界大戦前の数年間、クラウスは政治的・社会的・文化的には極めて保守的な姿勢を意図的にうち出す。もっとも時のジャーナリズムの似非言質や悪質な商売根性に対するクラウスの批判的態度を革新的とするならば、その姿勢は生涯変化することはない。しかしこの時期のクラウスとはといえば、世間一般で通用している「進歩」思想に背を向け、全く意固地とも言えるほど保守的な態度を守り続ける。

更に特徴的なのは、それ以前の世紀転換期のクラウスの風刺は、世の「進歩」に熱を上げるウィーン社会やウィーン人の唯美的態度に向けられたのに対し、この時期に入るとそれもむしろ悲観的なニュアンスを帯び、近代の「進歩」主義、とりわけ技術の「進歩」とその成果に酔い痴れる近代ヨーロッパ人全体に向けられるようになる。技術の「進歩」により恰も易々と「自然」を支配しようとする人間の「思い上り」を風刺する。例えば、近代技術の成果である飛行船の運航挫折 (UdW, 9.) やタイタニック号の沈没 (Ibid., 43f.) メッシーナの大地震 (Ibid., 50f.) など。

以上のような第一次世界大戦前の数年間のクラウスの状況も考慮しつつ——そして時代がヨーロッパ列強の帝国主義時代に相当することも等閑に伏してはならないが——、小論では第一次バルカン戦争を扱った『戦争だ』がいかなるイデオロギーを媒介したかを明らかにする。その際とりわけ鍵となるのはクラウスの保守性と技術の「進歩」や「進歩」思想に関する論及である。というのはこの時期のクラウスの保守性は、極めて重要な意味を持つからである。だが、「進歩」に関してここでは「進歩」対「自然」というあの有名な二項対立の哲学的考察よりも、当時の「進歩」主義思想がいかなるイデオロギーと結合したかの考察に重点を置くつもりである。

『戦争だ』はクラウスの著作の中でもあまり顧みられない小品ではあるが、クラウスの思想の核、特に「文化保守主義者」と呼ばれるクラウスの文化観や保守性・人間性を識る上でも非常に重要な著作と思われる。それはまた現代の我々にとっても示唆に富むものと思われる。

## 1. 軍事報告と観光——「見る価値ある物」——

さて『戦争だ』は『前半』が全くの引用記事の羅列から成り立ち、『後半』がグロッセ形式で引用記事とクラウスの寸評から構成されている。

『前半』の最初の部分にクラウスによる序言がある。その導入に従うならば、『戦争だ』の引用記事は主に2人のオーストリア人の派遣通信員パウル・ツィフェラー (Paul Zifferer) とエルンスト・クライン (Ernst Klein) の報告から成る。(両人ともに『ノイエ・フライエ・プレッセ』紙の派遣員と思われる。) 引用記事を配列順に追ってみると、1912年10月15

日ブルガリアのソフィアに参集したヨーロッパ列強やアメリカの新聞の55人の派遣通信者達は、当地で通信資格を受ける。その後オーストリア人派遣通信員達はブルガリアやセルビアやトルコなどの戦地や各司令部に赴き、各国各地で得た精粗様々な個人的「印象」や「観察」や「体験」を書き留め電報で自国に送る。その間彼らは自社の新聞の宣伝活動も行い報告する。（『戦争だ』はそれらの報告記事の引用から成る。）『前半』の1912年10月15日のツィフェラーによる最初の報告の発信地はソフィアであるが、戦局が変化するにつれ、つまり同盟軍が攻勢に出るに従い、報告の発信地は漸時南下、トルコへと近づいていく。『前半』最後尾に置かれた報告記事はイスタンブール司令部発信の1912年10月24日のものである。

我々はまず『戦争だ』を元にして技術の「進歩」と軍事報告について考えてみたい。その糸口として『戦争だ』の記事に報告されている派遣軍事通信員達の行動に注目したい。少し長くなるが1912年10月22日の記事（F, 360-362, S. 41.）をここに引用する。

「ブルガリア司令部への走行途上で。昨日11時45分、軍事担当官と軍事通信員をスタラ・ザゴラ司令部に運ぶ汽車がソフィアを発った。……我々は大声で笑い、押し合いへし合いしながら、我々用に予約されていた数室の車室へ入った。満足気な様子で様々な国籍の国民が相席していた。賑々しく様々な国民が入り交じって食堂車の座席についた。……朝食が供された。……フィリップポベルの次駅で駅員が語ってくれた。宣戦布告が出された日は、朝早くから夜更けまで大砲の音を聞いたと、……そのうち日が暮れてしまった。穏やかに月が農夫がうち捨てた畑野の上で輝いていた。突然、車内で興奮のどよめきが起った。……山の上に凄まじい炎が燃え上がっていた。……ゆっくりとその激しい戦争の松明は地平線に消えて行っった。興奮がおさまった。そこで乗客は挙って食堂車でサービスされる贅沢な夕食を味わった。ようやく夜半頃に我々はスタラ・ザゴラに到着した。ここで思わぬ大事件が我々を待ち受けていた。我々の宿泊用にはこの町の宿営が予約されていたであろうが、我々をそこまで運搬する自動車の予約が忘れられていたのである。……」

前述のフィッシャーが云うように我々は『戦争だ』にバルカン戦争の経過報告を期待することは出来ない。しかし、派遣通信員達は戦地の高級ホテルに宿泊し (Vgl. *ibid.*, S. 40), これから始まろうとする大きな体験に胸を躍らせる。(Vgl. *ibid.*) 彼らはブルガリア司令部までの移動手段に食堂車連結の「予約された」汽車 (おそらく一等車であろう) を利用し、多国籍の国民が相席する「国際的な」雰囲気の中豪華な食事サービスを堪能する。いわば世紀末開通したオリエント急行によるブルジョア観光さながらの旅を「軍事」報告として打電する。戦地に関する報告は必然的にこの進行中の一等車から見える車外風景の描写や停車駅で仕入れた聞知となり、それは束の間、人間の知覚に入ってはまた消えて行くのである。

このように『戦争だ』の引用記事には、近代的乗り物で旅をする派遣通信員側の様子と戦地の様子が随所でコントラストに、同時進行的に現われる。それはクラウド自身の引用の配列・省略技法が功を奏するとはいえ、その対照性・同時進行性をここで現に可能ならしめているのは、近代ヨーロッパの「進歩」した技術である。つまり上掲記事にも登場する電信技術(「電信局が占拠された」(*Ibid.*, S. 39.))と鉄道という交通機関の存在である。もっともこのような短時間移動と短期日程で、各国各地で軍事報告のための取材旅行が、一切が「予約のもと」円滑に(つまり予定どおりに)進行するのも電報や鉄道機関の存在が前提条件となっている。(「ブルガリア側からツィフェラーとクラインが健闘する。セルビアへ赴任する者もいれば敵地へ向かう者もいる。彼らは戦争の電信で連絡を取り合っている。」(*Ibid.*)いわば軍事通信員は、同時に近代技術の利用者でもあるわけだ。

ここで少しその近代技術の「進歩」の具現でもある鉄道機関に拘り、鉄道と人の係わりについて考察したい。実際飛行船ならずも、自動車や鉄道に代表される最新式交通機関を利用の上、部外者(「観光客」)が観光旅行しながら戦場に乗り込むというモチーフは、クラウドの場合にしばしば辛辣な風刺の下にさらされている。鉄道というものは、クラウドの著作全体からして極めて重要な意味を担っているのではないか。

周知の通り、鉄道は19世紀初頭に英国で初めて実用化されるや否や、

たちまちヨーロッパ全土に敷設され、世紀転換期頃にはヨーロッパ列強、特に英仏独各国による鉄道技術競争や敷設権争いに火がつくほど驚異的な発達ぶりを見せた。鉄道旅行の研究者であるヴォルフガング・シーヴェルブシュ (Wolfgang Schivelbusch) に拠ると、鉄道による移動は従来の徒歩や馬車による旅とは全く異質の作用を旅人にもたらしたという。中でも特筆すべき影響としては、「移動空間と時間の大幅縮小」、その付随現象としての「人間の知覚の変化」、そして人間が車室というカプセルに収納され恰も一つの荷物の如く運搬されるようになった「移動の受動化・軽便化」が列挙されよう。(『戦争だ』の特派員達はこれらの現象を逐一体験しているわけだ。)

このような技術による人間の知覚変化と足並みを揃えるように、文学の領域にも同時進行性、モンタージュ等の技法が導入された。だがここでそれをクラウスの著作に投射して美学的観点から詳細な分析をするつもりはない。もう少し社会的現象として捉えたい。今シーヴェルブシュも引き合いに出しているヴェルター・ベンヤミン (Walter Benjamin) の有名な理論を少し援用する。ベンヤミンは『複製技術時代の芸術作品』(*Das Kunstwerk im Zeitalter seiner technischen Reproduzierbarkeit*) の中で次の様に云う。近代技術の「進歩」に伴い芸術作品の複製大量生産化が進んだ結果、人間が事物を空間的・時間的に近くへ引き寄せたいという強い要望を抱くようになった。一方全ての事物の複製の可能性は、人間が複製を受容することによってオリジナルの持つ「一回性」を克服し、物を描き、模写し、複製して所有しようという人間の要求は日常化したと<sup>7</sup>。ならば、近代技術の「進歩」により実現した鉄道交通機関というものは、人間を「輸送」しながら同じコースを走行もしくは巡回することによって、旧来の旅の風景の「一回性」を消滅させてしまったといえよう。それを「複製」し「見る価値ある物」(*Sehenswürdigkeit*) として商品化したのが、近代の観光事業である。逆に考えるなら、より速く、より遠くの物を見聞し、入手したいという人間の要求を満足させる鉄道は、近代の観光事業 (*Fremdenverkehr*) を推進する大原動力となった。(Vgl. Schivelbusch 1989.)

「見る価値ある物」という商品、クラウスはこの「見る価値ある物」

の敵対者であった。1908年のエッセイ『名所について』(*Von den Sehenswürdigkeiten*)<sup>8</sup>の中でクラウスは、世紀転換期の装飾性を極めたウィーンという町が、今やそれを売り物にしようと記念碑や墓標や大聖堂といった大仕掛の見物用の「文化で街路は舗装されている」、「この地では近代的な汽車が歴史を通り抜けて走る」など現代の市内観光パンフレットの常套句を並べるかの如く、風刺の筆を運んでいる。無論このようなクラウスの敵対は「見る価値ある物」の商業化に対するものであるが、しかし営利目的のために「見る価値ある物」を収集・開拓して止まらない人間の倫理的墮落に対する批判は、いっそう厳しい。それは単に「名所」等観光用途の「見る価値ある物」に限らず、当時の社会風潮に対しても容赦ない。例えばそれは著作『道徳と犯罪』(*Sittlichkeit und Kriminalität*)<sup>9</sup>の中で、当時ウィーンの自由主義の名の下に私的生活の切り売り(=「見る価値ある物」の収集)が為される社会風潮に対して激昂したクラウスの態度にも明確に表れている。

このように見てくると、クラウスの著作で再三再四観察される近代交通機関を利用した観光旅行や遠足というモチーフは、近代技術の「進歩」とそれによる人間の「見る価値ある物」への(異常なまでの)欲求を表しているものと思われる。それは彼がこの「進歩」と観光に関して1909年のエッセイ『進歩』(*Der Fortschritt*) (ChM, S. 197-203.)で次の様に述べていることから確認されよう。

「私は旅をした。そして現に……観光の促進者である進歩にもう沢山というほど出会った。私は以前より速いスピードで前進した。しかし大抵の場合間違った(falsch「偽りの」の意味でもある)道に進んでしまった。そこで私の次のような推測はまた強固なものになった、即ち進歩とはホテルマン〔筆者注:「見る価値ある物」を商売とする者〕であると。そして至る所でその野心のために、人間のより善くなろうという努力は前進するのを止めてしまったように思われた。……両足は前へ前へと進んでいった、けれども頭は後ろに残ったままで心は疲れ果てていた。……」(強調:筆者) (ChM, S. 202.)

ヨーロッパの近代技術が生んだ鉄道という「快適な」交通手段に身を委ね、ある時は汽車の窓から、ある時は立ち寄った戦場地で「見る価値ある物」を入手する、つまり今でいう特ダネを狙う『戦争だ』の派遣通信員達の行動は、以上のような見方をすると近代の観光旅行の延長線上にあることが分かる。技術の「進歩」（乗り物）一人間の知覚や欲求の変化―「見る価値ある物」の商品化（観光）といういわば近代技術化の流れを体現するのが、他でもない派遣通信員達である。恰も観光旅行気分で「見る価値ある物」を集めて廻る軍事通信員達の非道さを、クラウスは軍事報告に見られる観光旅行的側面をモンタージュすることで逆写している。

クラウスの風刺の極みは、もちろん戦地の惨状までを、あるいは惨状こそを「売り物」にしようとする派遣通信員達の非道さに発揮される。それは例えば、派遣通信員が最新技術の自動車を利用して戦地に乗り込んで書いた記事を引用したグロッセ『現場に居合わせた人たちはいかに行動したか』（*Wie sich einer benahm, der wirklich dabei war*）（F, 363-365, S. 47.）に集約されている。

「私の自動車は〔トルコ人〕避難者の流れに突っ込んだ。……負傷者は私を……医者と思ったらしく、私に傷を縫合してくれるよう助けを求めてきた。……そこに停車中の僅か数台の救急患者運搬車といえば、撃ち潰されていたり馬が用意されてなく、人々は頭や下腹部の撃ち傷の口が開いたまま、身体を引きずって進むことを余儀なくされていた。敵軍の大砲が次第に接近してきた。……私の自動車はぬかるみに突っ込んで動かなかった。……兵士が12人寄ってもその場所から自動車をずらせることが出来なかった。それほど彼らは憔悴し切っていたのだ。……そこに6頭の雄牛に引かれた馬車が現れた。直ちに雄牛が馬車から外され自動車に繋がれた。自動車が……引き出された。私は自動車に乗り込み猛スピードでその場から逃走した。この水曜日がアブデュル軍の運命を決定した。」

先に触れた『戦争だ』の序言においてクラウスは、「バルカンにおいて

オーストリアは印象主義者達〔筆者注：派遣通信員達〕により代表されている」(F, 360-362, S. 39.) オーストリアは「[戦争の] 様々な印象や雰囲気やデテールを入手したいと希望している」(Ibid.) (これが「見る価値ある物」である) と皮肉っぽく述べている。なるほど『戦争だ』に掲載された報道記事には、世紀転換期の印象主義の影響がまだ濃厚に表れている。色彩語をみだりにちりばめた視覚的効果ある美文あり、擬声語を響かせる文あり、砲弾が飛び交う悲惨な戦場の彼方に印象派の絵画を彷彿させるような「地平線に太陽が沈む」美しい光景が描写される。あるいはここで見てきた派遣通信員達の行動にしても、例えば第一次大戦後の大衆時代に活躍する冒険作家カール・マイ (Karl May) やルポルタージュ作家エーゴン・エルヴィーン・キッシュ (Egon Erwin Kisch) 等の旅や行動範囲と比較するなら、むしろ受動的で(「予約された」)ブルジョアの観光旅行の趣がある。しかしそのような要素と相俟って、「ヨーロッパ世論の代表」(Ibid., S. 43.)を自称して憚らない派遣通信員達の、誇るべき近代ヨーロッパの先進技術を利用した報告、表現主義まがいの文体を織り混ぜて記した記事、戦争捕虜のインタビューを報告した臨場感溢れる記事は、やはり技術時代という新時代が要求する「見る価値ある物」として、当時のウィーン、そしてヨーロッパで幅広い「予約購読者」層を獲得したものと思われる。

総じて、クラウスは「見る価値ある物」を求めて止まない近代ヨーロッパ全体の墮落を風刺する。彼は云う、「非道 (Nichtswürdigkeit, Sehenswürdigkeit にかけた語か?) という装飾はうち止まぬ人類の悲惨さを声高に嘲っている」(Ibid.) と。

## 2. 戦争と商業——オスマン帝国の衰退——

前述のクラウス研究者フィッシャーは、クラウスは風刺という保守反動 (Reaktion) によって「戦争と商業 (Kommerz) の結合」を見抜いた、第一次大戦当時としては全く希有にして厳格な平和主義者であると評価する。(Fischer 1980, ibid.) 我々も次に『戦争だ』を元にして、「戦争と商業」について考えてみたい。

小論の1において我々も若干、『戦争だ』の軍事報告と営利の結合に対

するクラウスの批判を見てきた。それは読み直すなら、オーストリア国内やヨーロッパ市場での「予約購読者」獲得のための戦術と関連するものである。

ここでは『戦争だ』に見られる派遣通信員達の「予約購読者」獲得のための対外戦略について少し注目したい。その際まず念頭に置きたいのは、軍事派遣員達が「ヨーロッパ世論の代表者」(Ibid, S. 43.)を自称しながらバルカンを廻っていることである。ならば、我々は彼らの対外戦略をオーストリア延いてはヨーロッパ列強のバルカン方面における対外市場政策と重ねて観察することが許されよう。その宣伝戦略の動向は、例えば、派遣通信員が戦地ブルガリアで「予約購読者」を勧誘したという記事 (Vgl. ibid., S. 50.), セルビア司令部においても当新聞が盛んに購読され大成功を収めている (Vgl. ibid., S. 51.), オリエントでも当新聞は信望を集めていて大いに購読されている (Vgl. F, 363-365, S. 38.) 等の宣伝的文章、ブルガリア人の最たる愛読新聞は『ノイエ・フライエ・プレッセ』紙であるとの賛辞を受けたと大言壮語に書いた記事 (Vgl. ibid., S. 34.) 等に読み取れる。これはバルカン戦争の背後でヨーロッパ列強のバルカンやオリエント方面における帝国主義的植民地政策が、いとも巧妙に運ばれていると見る事が出来る。クラウスは『ノイエ・フライエ・プレッセ』紙の手広い市場獲得作戦もさることながら、当新聞のバルカンからオリエント方面への市場拡大にヨーロッパ列強の東方進出を併せて風刺していると思われる。

更にここで考察を深化するために我々は次のことに注目したい。即ちクラウスがいかなる方法で戦争と商業が結びついたと認識しているか。これはまた小論の目指す『戦争だ』が媒体したイデオロギーの検証にも重要である。

まず政治及び宗教上の観点を取り上げると、第一次バルカン戦争とは、五百年近くもの長期間バルカンを支配してきたイスラム勢力と、その支配からの解放を目指して戦うキリスト教諸国との争いでもある。『戦争だ』のあるブルガリアの戦勝感謝の礼拝を報告した引用記事には、国民が十字を切って熱心に祈る姿は誠に美しくて威厳に満ちているが、「目立たないように片隅で立っているのは政治であり、ブルガリア人がキリス

ト教の要素をイスラム教の敵対者に対して誇示するためにどの瞬間をも非常に巧妙に利用していることを喜んでいる」(F, 360-362, S. 49.) とあり、政治と宗教の結び付きが示唆されている。バルカン戦争の背後に潜むヨーロッパ列強が、宗教的共通基盤からは、ブルガリアに容易に接近することが出来たのは想像に難くない。差程の手腕は必要でない。

では異宗教の国に対する戦略手段はいかに講じられたであろうか。そこで取り上げたいのは、経済政策と文化政策の結合である。そのために『戦争だ』の『後半』に掲載されたクラインの記事を引用する。

「ある軍事報告者の観察。……ブルガリア人は向上心ある人間 (der Vorwärtstrebende) であり感傷的なところの無い人間である。ブルガリア人は息つく暇も惜しむほどのエネルギーを傾けて、西洋 (Abendland) の文化が与え得る全てのものに食らい付いてくる。二万人未満の住民しかないこの町が、今や自らの資金で劇場を建設しようというのは、いかにもこのブルガリアの町らしいやり方だ。……そして彼らがこの外国人通信員達に示す歩み寄りの態度以上に彼らの進歩を如実に語るものはない。彼らは我々がヨーロッパの世論の代表であるということを、ヨーロッパは我々の目を通して見えることを十分よく心得ている。……

それに対して、トルコ人と来たら！トルコ人は昔同様、夢想家のままで進歩しなかった。コーランのスーランの章でいつまでもぐずぐずしていた。……トルコ人にとって進歩が何だ、文化が何だ！……薄明の中にいられさえすればトルコ人は機嫌がいいのだ。そして全思考や感情や行動を根底から変えることを強要する新しいものに対しては、敵意一杯に背を向ける。トルコ人はそれについて知ろうともしないし、近代 (modern) という時代の襲撃に背を向けてモスクの中に立てこもる。……E. クライン」(Ibid., S. 43f.)

ここから読み取れる派遣通信員達が使用した宣伝的戦略、売り込み作戦は「ヨーロッパ世論の代表」である彼らが与え得る文化、西洋文化を貪欲に摂取し、彼らから「新しいもの」を習得し、「全思考や感情や行動を」徹底的に「変える」ことが国民全体の「近代化」と「進歩」に結び

つくという主義主張である。「ヨーロッパは我々の目を通して見える」という主張も、やはり優れた交通網や電信を張り巡らせた、技術の「進歩」した西洋が後楯になってのことであろう。クラウスはこの「進歩」イデオロギーを攻撃する。しかし我々はここで立ち止まって少し時代背景を考慮する必要がある。

小論の冒頭でも既に触れた様に、13世紀来バルカン地方を支配していたのはトルコである。ところが栄華を極めたトルコは遠い昔の姿、第一次バルカン戦争に臨む頃のオスマン帝国の現実には、「ヨーロッパの病人」と呼ばれるほど政治的にも経済的にも破綻を来していた。即ち14世紀に支配下に治めたバルカン諸民族の民族意識が高まる一方、帝国内ではスルタンによる専制政治が行き詰まりを見せ、フランス、イギリスなどの西欧近代国家の政治をモデルとする「近代化」が行なわれた。経済面でもトルコは到底自立できる状態ではなく、ヨーロッパ列強への依存関係が強まり、経済的植民地化が進む結果となった。とりわけヨーロッパ資本の援助によるオリエント方面への鉄道建設は、例えばドイツがそれを瀕死のトルコを救援するための「先進技術国」の任務と見做したように<sup>10</sup>、列強の技術によるトルコ進出にいつその拍車をかけた。文化・社会面でもオスマン帝国はヨーロッパとの「交流」が盛んであった。特にスルタンの国民がジャーナリズムというものを見聞したのもハブスブルク家の首都においてであったという。<sup>11</sup>

言うまでもなく経済開発と文化開発を合併させた方法は、19世紀帝国主義時代の植民地政策の常套手段であったわけであるが、前掲のクラインの記事に見られる宣伝的戦略としての考え方、つまり近代ヨーロッパが与え得る「文化」や「新しいもの」が非ヨーロッパ国トルコの「進歩」に貢献するというイデオロギーは、やはり資本や「進歩」した技術の保有する国の文化＝「進歩」した文化＝優位の文化という西欧文化中心主義思想に由来するものと云えよう。

今、西欧文化中心主義と文化政策を考えるに当って少し視点を変えてみたい。『戦争だ』においては、派遣通信員達の様子と並列して現われる戦地の光景がトルコであることが多い。大抵の場合トルコ軍の惨状の報告であるが、その中に次のような引用記事もある。

「敵国で。……敵国で重要な問題となるのは宿舎である。……ブルガリア人が移住した家々の間に……多数の人けの無いトルコ人の家々がある。ハーレムもあり、今も建物内の秘密を守るかのように格子のついた窓がある。……とり憑かれたかのように立ち入ると、今も変わらず信じてしまうのだ、どこか木造柱の影にオグリスクがふと現われるに違いないと。しかし絹製の布団はあちらこちらに散在し、引き裂かれ、燃やされていた。……数冊の綺麗なトルコ語の本が破れて表紙から外に出ていた。訝しげにそれらを手に取った。それらはおそらく女達皆が読んだであろう。しかも最後に好色な短編集があった。これらの短篇がコーランの格言を守っているとは更々思えなかった。このような一軒の空き家を豪華絢爛にしつらえることが出来た。……見知らぬオグリスクが使用した裂けた絹布団を頭の下へ押し寄せると、ハーレムでは素晴らしい夢を見ることができるのだ……P. ツィフェラー」(Ibid., S. 37f.)

つまり、ここには『千夜一夜物語』ばりの幻想のトルコが混在して記されている。エドワード・W・サイド (Edward W. Said) の言を待つ迄もなく、この戦場に突如現出するハーレムに満ちたトルコの叙述が、派遣通信員の観念的エキゾチズム、オリエンタリズムの表象であることが分かる。オリエントそのものはまた世紀転換期の唯美主義者によってこよなく愛好された装飾の世界であった。当時のヨーロッパ人は単にトルコのみならず、エジプトやインド、アラブ諸国、中国、日本など全ての国をも一括してオリエントと称し、その東洋文化をいわば折衷的に摂取した。東洋風の建物を建て、豪華なペルシャ絨毯、寝椅子、つり香炉等の小物で室内を装飾し、陰影に満ちた実在しないハーレムの女を夢想しては、美的趣味や欲望を満足させるスタイルが流行したという。

あるいは通信員達が使う国民性を表す表現にもヨーロッパの(固定的)価値基準が窺える。例えば彼らヨーロッパ人の行動の典型は「勇猛果敢」(Tapferkeit) であるに対し、トルコ人の印象は「怯懦」(Feigheit) である。クラウドはこの対照を殊更に強調している。(Vgl. ibid., S. 40ff.)

このようなオリエンタリズムをしてサイドは「オリエントを支配し再構成し威圧するための西欧の様式」<sup>12</sup>であると指摘する。上掲のツィフ

エラーの記事にも見られる様に、時代が早いテンポで進行しても、近代ヨーロッパ人が描くオリエント像は『千夜一夜物語』のステレオタイプから一向に前進しなかった。オリエントのイメージを彼らは常に自分たちの想像下に置いていた。このような観念上の支配―被支配関係もまた西欧中心主義の文化政策を実行する上で有利に作用したことは十分に考え得る。

さて『戦争だ』の『後半』には、わざわざクラウス本人によって「ブルガリアの成功の秘訣」という皮肉めいた副題が付されている。（つまりブルガリアは西洋文化を遮二無二摂取してヨーロッパへと脱皮したが故に勝利を手にしたというのだ。）実際に「成功」したのは「進歩」イデオロギーを宣伝手段にバルカンにおける市場を取り込んだヨーロッパである。

クラウスはこの「進歩」イデオロギーを風刺する。『戦争だ』の『我々の害にはならない』（*Uns schadet nix*）（Ibid., S. 39.）というグロッセに引用された記事に以下のような箇所がある。

「トルコ帝国の未曾有の崩壊は、今なお世間では謎のように思われている。……我が新聞の友人が……あるトルコの有識者の手紙を我々に読むことを許可した。……この手紙の中で少し逆説的に思える次の主張がなされている。つまりトルコはヨーロッパ文化の産物と見做されている映画劇場や歌謡曲や新聞などが原因で零落してしまった、というのである。……トルコはヨーロッパからヨーロッパ文化ではなくて、文化の毒素を譲り受けたに過ぎない。……啓蒙や進歩や自由に対して有利に働いたのはある新聞……三百代言的放縦さにかけては他の殆ど類のない、ある新聞である。正にそれがトルコ帝国存続の諸条件の一つであったもの、つまり権力への盲進、絶対服従、回教徒の厳格な規律を蝕んでしまった、というのである。……」

重複引用で複雑であるが『我々の害にはならない』の引用記事全貌を見ると、上掲記事で引かれる「逆説的に思える主張」の箇所「つまりト

ルコは……規律を蝕んでしまった」は、クラウスが風刺的に引用したわけではなく彼自身の言葉の代弁であることが分かる。近代ヨーロッパ的な「啓蒙や進歩や自由」を、「ある新聞」から詭弁を弄して売り込まれたトルコは独自の存在基盤を失い、衰微の一途を辿ったのである。トルコの「敗戦の秘訣」は「ある新聞」の「進歩」イデオロギーに毒され、トルコ固有の文化を喪失した結果とクラウスは見ている。

1912年10月24日のトルコのイスタンブール司令部からの報告には次のようにある。1で前述のとおり、この引用記事は『前半』の最後を占めている。

「……夕方5時頃、オーストリア人、ハンガリー人、ドイツ人の各通信員達が乗り合わせたコンパートメントでは、2本のハンガリー産のシャンペンをあけて……パーティが賑やかに催されていた。……汽車の外では夕日の暮れるなか、イスラム教徒の兵士達が泉の畔で沐浴をしながら夕べの祈りを捧げていた。……」(F, 360-362, S. 52.)

再びヨーロッパ人通信員達の様子が汽車の車室の中、イスラム教徒の様子が車外風景というコントラストである。ここでは立ち入らないが、クラウスは決して非合理的なものに回帰するタイプの反啓蒙主義者、保守主義者ではない。しかしながら「進歩」したヨーロッパ文化に頑なに背を向け、太古からの信仰に拠り所を求めるイスラム教徒の静かな祈りの姿は、近代ヨーロッパ人の過度の世俗化を厳しく戒める風刺となっている。

### 3. まとめ

最後に小論の最初にあげた若干の問題についてまとめて考えたい。

第一次バルカン戦争を扱った『戦争だ』は、全体の構成として、派遣通信員達のバルカンのキリスト教諸国における報告から、トルコの衰微の報告へと移っていく。しかしクラウスの「引用自身に語らしめる」モンタージュ技法は、トルコが衰微の一途を辿る一方で、逆行的に近代ヨーロッパの没落、即ち近代ヨーロッパの営利本位の非人間性、倫理的退

廃を風刺している。そして『戦争だ』の記事自体が媒介したイデオロギーというのは、やはり西欧文化中心主義であろう。「進歩」した技術や文化を有するという「進歩」思想も、この西欧文化中心主義と結び付いていることは既に見てきた。それが「戦争」を「商売」と結合させる方法であることも見てきた。

クラウスの保守主義に関しては諸氏さまざまな位置付けをしているが、その論究は別の機会に譲るとして、そもそも「進歩」、「保守」の概念も時代のコンテクストによってニュアンスが異なる。「進歩」が西欧化を意味した時代に「保守」は非西欧化、つまり反西欧中心主義を意味する。第一次大戦前のヨーロッパで帝国主義的傾向が強まる中では、西欧文化中心思想も人口に膾炙していた。そのような時代にむしろ「保守」的傾向を強めたクラウスは、現代で云う文化相対主義に立脚できる希有な平和主義者であったといえよう。それは近い将来、ヨーロッパでナチスのテクノロジー崇拜と狂信的な自民族中心主義が台頭することを考えるならば<sup>13</sup>、クラウスがいかに関心が「間違った」方向へ進んでいたかを見抜いていたことが分かるのである。

#### 注

- 1 Kraus, Karl (Hrsg.): *Die Fackel*, Wien 1899-1936. Nr. 1-922. (以下Fと略記)
- 2 本文中の『ファッケル』からの引用については、以下号数とページ数のみを示した。本文中でも触れた様に、『戦争だ』は『黒魔術による世界の没落』に収録されているが、そこでは『前半』と『後半』が1箇所に纏められ、修正・加筆の上、表題は„*Das ist der Krieg—c'est la guerre—das ist Zeitung*“と改題されている。つまり『前半』原題中の Moloch という語が Zeitung と改められている。なお、筆者は原書に依拠したく、小論のテキストとして『ファッケル』に掲載された『戦争だ』を使用した。
- 3 Kraus, Karl: *Untergang der Welt durch schwarze Magie*, Frankfurt a. M. 1989. (以下 UdW と略記)
- 4 この間の事情は法政大学出版局『人類最後の日々』(池内紀訳)の訳注を参照させて頂いた。

- 5 Fischer, Jens Malte : *Das technoromantische Abenteuer*. In : Vondung, Klaus (Hrsg.) : *Kriegserlebnis*, Göttingen 1980, S. 284.
- 6 Vgl. Schivelbusch, Wolfgang : *Geschichte der Eisenbahnreise*, Frankfurt a. M. 1989.
- 7 Vgl. Benjamin, Walter : *Das Kunstwerk im Zeitalter seiner technischen Reproduzierbarkeit*. In : W. B. : *Gesammelte Schriften*, Frankfurt a. M. 1974 ; 2. Aufl. 1978.
- 8 Kraus, Karl : *Von den Sehenswürdigkeiten*. In : K. K. : *Die chinesische Mauer*, Frankfurt a. M. 1987, S. 182-186. (以下 ChM と略記)
- 9 Kraus, Karl : *Sittlichkeit und Kriminalität*, Frankfurt a. M. 1987.
- 10 杉原 達 『オリエントへの道——ドイツ帝国主義の社会史』1990年 藤原書店 参照.
- 11 ジョルジュ・カステラン 『バルカン 歴史と現在』 山口俊章訳 1991年 サイマル出版会 参照.
- 12 エドワード・W・サイド 『オリエンタリズム』 今沢紀子訳 1986年 平凡社 参照.
- 13 ジェフリー・ハーフ 『保守革命とモダニズム——ワイマール・第三帝国のテクノロジー・文化・政治』中村幹雄他訳 1991年 岩波書店 参照.

主要参考文献 (注に挙げたものを除く)

- Schick, Paul : *Karl Kraus*, Hamburg 1965.
- Fischer, Jens Malte : *Karl Kraus*, Stuttgart 1974.
- Krolop, Kurt : *Sprachsatire als Zeitsatire bei Karl Kraus*, Berlin 1987.
- Kramer, Dieter u. Lutz, Ronald (Hrsg.) : *Reisen und Alltag*, Frankfurt a. M. 1992.
- シュテファン・コッペルカム 『幻想のオリエント』池内紀他訳 1991年 鹿島出版会
- ヤン・ベルク他 『ドイツ文学の社会史』(上) 山本尤他訳 1989年 法政大学出版会

# Karl Kraus und der Erste Balkankrieg

## —Der Zusammenbruch des Türkischen Reichs im Widerschein *der Fackel*—

Yuki YABUMAE

1912–1913 führten Bulgarien, Serbien Griechenland und Montenegro den Ersten Balkankrieg gegen die Türkei, die eine Niederlage erlitt. Karl Kraus zitierte in der Zeitschrift *Die Fackel* vom 11. und 12. 1912 eine Reihe Zeitungsartikel über den Balkankrieg (Kriegskorrespondenzen) in zwei Teilen: *Das ist der Krieg—c'est la guerre—das ist der Moloch!* und *Glossen. C'est la guerre. Das Geheimnis des bulgarischen Erfolges*. Kraus wagte auch dort, durch seine eigene Zitat-Technik die verfälschten Tatsachen in den Zeitungsberichten satirisch zu entlarven.

Daß in diesen Jahren vor dem Ersten Weltkrieg Kraus eine sehr konservative Haltung gegenüber dem Fortschrittsgedanken der neueren Zeit, besonders gegenüber dem Fortschritt der modernen Technik, einnahm, ist zu berücksichtigen.

Im vorliegenden Aufsatz wird anhand der obengenannten Zitate von Kraus die Ideologie, die damals durch die Kriegskorrespondenzen vermittelt wurde und eine Verzerrung der Wahrheit verursachte, ans Licht gebracht. Dabei spielen der Fortschrittsgedanke und die konservative Position Kraus', der zum „Kulturkonservativismus“ neigte, eine führende Rolle.

1) Kriegskorrespondenzen und Fremdenverkehr—Sehenswürdigkeit: Bei den Zitaten von Kraus taucht häufig das Motiv der Eisenbahnfahrt europäischer Kriegskorrespondenten im Schlachtfeld auf. Es wird hier zuerst behandelt.

Die Eisenbahnnetze entwickelten sich im ganzen Europa des 19. Jhs. erstaunlich. Sie förderten den modernen Fremdenverkehr, der alle „Sehenswürdigkeiten“ als Produkte zu entwickeln versuchte. Die Eisenbahnen verkörpern bei Kraus-Zitaten den großen Fortschritt der modernen Technik, die Eisenbahnfahrt die Sucht der Menschen nach „Sehenswürdigkeiten“.

Wie Touristen fahren die Korrespondenten mit dem Zug und wollen einen gräßlichen Anblick im Krieg als „Sehenswürdigkeit“ schildern. So zitiert Kraus manche Berichte von den bequemen Eisenbahnreisen, um solche Unmenschlichkeit, „Nichtswürdigkeit“ der Korrespondenten, satirisch zu enthüllen.

Übrigens werden wohl die Kriegsberichte, die so moderne Elemente der technischen Zeit enthalten, im damaligen Europa, wo man sich technisch „fortgeschritten“ glaubt, viel gelesen und können den Fortschrittsgedanken bestärken. Kraus kritisiert das.

2) Der Zusammenbruch des Türkischen Reichs : Zweitens wird der „Kommerz“ von den Kriegskorrespondenten behandelt.

Neben den Kriegsberichten zitiert Kraus mehrere reklamehafte Berichte von Korrespondenten für ihre eigene Zeitung ; sie nennen sich „Vertreter der öffentlichen Meinungen Europas“ und machen Reklame für die Zeitung in den Kriegsgebieten, z. B. in Bulgarien und in der Türkei.

Aus ihrem Handel kann man ersehen, daß hinter dem Ersten Balkankrieg die Kolonialpolitik der imperialistischen Mächte steht. Dabei ist die Wirtschaftspolitik eng mit der Kulturpolitik verbunden : Die Korrespondenten machen Reklame, indem sie behaupten, die europäische Kultur sei „fortschrittlich“ und könnte zur Entwicklung der Balkanländer und der Türkei viel beitragen. Sie schreiben dann, die Bulgaren wollten alles greifen, was ihnen die Europäer geben könnten, die Türken aber wollten nichts ; deswegen hätten die

Bulgaren Erfolg.

Kraus kritisiert aber scharf diesen Fortschrittsgedanken, der auch mit dem Fortschritt der modernen Technik in Europa eng verbunden ist. Kraus sieht, daß die Türkei zugrunde ging, weil sie durch „die Zeitung“ so viel Kultur (z. B. Aufklärung, Fortschritt) von Europa übernahm, daß sie ihre eigenen Existenzbedingungen verlor.

Die Ideologie, die die Kriegskorrespondenzen verbreiten und der Kraus kritisch gegenübersteht, ist solch ein eurozentrischer Gedanke.

Obwohl es bei den Kriegskorrespondenzen *Das ist der Krieg...* um den Erfolg der Balkanländer und um den Zusammenbruch des Türkischen Reichs beim Balkankrieg geht, kritisiert Kraus satirisch mit seiner Zitat-Technik das Europa, das mit dem Fortschrittsgedanken untergeht.